

ミニ FM 局 “FM ペポワ” による教育実践顛末記

The whole story of educational practice using Mini FM radio “FM PEPOWA”

小内 純子

1. はじめに

パブリック・アクセスを教育に導入することを目的にミニ FM 局の開設を試みたのは 2003 年度のことである(小内, 2005)。この教育実践を研究対象とするということで, 2003 年度と 2004 年度の 2 年間にわたり札幌学院大学研究促進奨励金を得てプロジェクトが進められた。初年度は, 大國充彦, 高橋徹(当時), 中澤秀雄(当時)との共同研究, 2 年目は, 高橋徹, 皆川雅章との共同研究として申請している。

パブリック・アクセスとは, 一般に, 「市民の番組制作への関与・参加」という意味で用いられる。しかし, 「単に市民がメディアに参加させてもらうとか, チャンネルの一部をあけてもらう」のではなく, 「現在の情報政策, メディア経営のありかたを, 市民と共生するものに変えること, 市民の自己表現・社会的表現の力, コミュニケーションの力を獲得することを支援する社会的な働きかけ」(津田, 2002)といったより広い意味をもった概念である。このプロジェクトは, ツールとしてミニ FM を用い, ラジオの番組制作に関わることで, 学生に情報の送り手側になることを経験してもらうことを企図していた。期待される教育効果は, 情報発信側に身を置くことで, メディアに対する受身的な態度を見直し, 情報収集を心掛けることを通じて, 社会全体の動きにも関心を持つような人材を育てる点に

あった。

2. スタート時の混乱

2003 年度の研究促進奨励金によって, 早速, ミニ FM 機材一式を発注するとともに, 参加学生の募集を開始した。高校時代にコミュニティ FM でサポーターの経験をもつ学生を中心に参加学生 9 人と一緒に活動を開始する。ラジオ局の名前は FM ペポワと決まった。名付け親は, このプロジェクトの立ち上げを主導した中澤教員(当時)である。江別のアイヌ語の「エベツ」とフランス語の「希望」を意味する「ポワール」を合わせて「ベツポワール」とし, それを略したのが「ペポワ」である。江別の希望の星に成長するという大きな願いが込められている。当初, 最初は課外活動として取り組み, そのなかで, 授業としての展開や地元商店街のまちづくり活動との連携, 大学全体で共有する情報メディアとしての可能性などを検討していこうというスタンスで進められた。

放送機材が搬入されたのは 4 月 22 日, 機材の搬入から放送が軌道に乗るまでの期間, 札幌市東区のコミュニティ FM 放送局「さっぽろ村ラジオ」で当代表を務めていた松崎霜樹氏にアドバイザーをお願いした。その後, 学習会や市内のコミュニティ FM 局の見学などを行いながら準備を進めたが, 学生の食堂がある G 館 6 階まで電波を飛ばす方法が決まらず放送開始までには予想以上の時間を要した。結局, 放送機材を C 館 4 階から G 館 8 階

へ運び込んで放送することに決まったのは7月になってからである。初の公開生放送に辿り着いたのは7月16日で、夏休み前の正式放送は、この公開放送と7月26日に行われた「野幌商店街祭り」での出張放送、7月31日のオープンキャンパスでの放送の3回のみであった。

後期から定期放送が開始された。この間、サークル会館であるF館の一室をFMペポワが使用することが認められた。FMペポワの機材はC館4階からF館5階へ移され、ようやく居場所が確保され、G館までの運搬距離も短くなった。定期放送は、週2回水曜日と木曜日に行くことになる。しかし、放送はなかなか軌道に乗らなかった。様々な要因はあったが、1番大きかったのは、昼休みに放送するために、F館5階からG館8階まで放送機材を運搬し、組み立て、放送終了後に再び解体し、F館まで運搬する作業の負担が大きすぎた点にある。その負担が特定の学生に集中したため学生内部で不協和音が生じるようになる。教員スタッフもいろいろとアドバイスをするが、なかなか事態は改善されなかった。活動を継続するためにはやはりこの問題をクリアする必要がある。そのためには学内にスタジオを設置することが必要不可欠であることを思い知らされた1年目であった。

3. 継続のための仕組みづくり

2年目の課題は、如何に活動を継続するための仕組みを作るかという点にあった。

まず、懸案だったスタジオの設置に関しては、2003年度終盤に教育予算が認められ実現することになった。設置場所やスタジオの大きさという点で、すべてが希望通りというわけにはいかなかったが、多くの方々の協力を得てF館1階に常設のスタジオを設置することができた。ただし、茶色の四角い箱のようなスタジオは、「馬小屋のようだ」と当時の学

生メンバーの間では不評であったと聞く。

また、2004年度札学院大学研究促進奨励金の交付を受けて、スタジオ用の放送機材を新たにワンセット購入し、移動用と常設用の機材を備えることができたことも大きかった。F館5階の部室に練習やイベントのための放送機材が、スタジオに定期放送用の放送機材が、それぞれ整うことで活動環境は格段に改善された。いまから振り返れば、活動を始めて2年目でこれだけの条件整備ができたことはラッキーであったし、多くの人がこの活動を温かく見守り、サポートして下さっていたことに今更ながら感謝したい。

もう1つ大きな出来事として、学部の講義科目との連携が図られた点がある。ちょうど社会情報学部ではカリキュラムの改訂作業を進めており、社会系の演習科目の1つとしてラジオ番組制作を取り入れることになったのである。2005年度から始まる「情報メディア演習I」という科目で、講師にはこのプロジェクト当初からアドバイザーをして頂いていた松崎氏をお願いすることになった。その道のプロをお願いすることで、ラジオの特性やパブリック・アクセスの意義、そしてラジオ番組の制作上の留意点など質の高い演習を実現することが可能になった。また、この授業には、SA (Student Assistant) を配置することになり、そこにFMペポワの学生メンバーも加わるようになった。SAとして教える側に立つことで彼ら自身が得るものも多く、その経験がFMペポワの放送に反映されるという期待もあった。さらに、ラジオ番組制作を授業に取り入れることは、2年生がペポワの活動に参加し易いルートを確保するという目論見もあった。なぜならこの授業は2年生の前期科目として設定されており、この授業を受けることを契機にラジオ放送に関心を持ち、FMペポワに参加してくる学生が現れる可能性が期待できるからである。SAとして参加する学生にも授業内容に関心が高い受講

生に意識的に参加を呼びかけるように求めた。

図1は、当時、私が描いていたFMペポワと情報メディア演習Iを中心とした活動の関連図である。特に、情報メディア演習Iを受講した学生のなかから、ラジオ番組づくりのイロハを学んだ学生が新しい学生メンバーとして入ってくるようになることに期待していた。学生はいずれ卒業していくことになるので、常に新しいメンバーを確保することは、大学でラジオ放送を続けていくためには極めて重要なポイントだからである。

こうして学部の講義との連携ができあがり、学生メンバーと受講生の繋がりも構築され、2年目でなんとか持続可能な仕組みを作り上げることができた。この年のFMペポワの活動は、SAとして「情報メディア演習I」をサポートする一方で、定期放送とイベント放送を2本柱として進められていく。イベント放送としては、前年度に引き続き「野幌商店街祭り」とオープンキャンパスで放送したほか、大学祭や東川町のフォトフェスタへも参加し広がりを見せた。

4. その後、10年間の活動

(1) FMペポワの活動と演習科目の関連について

以上のように2年目で作り上げた仕組みの下でその後10年間の活動が行われた。その間、この関連図がうまく機能したのかという必ずしもそうとは言えない。松崎氏が講師の情報メディア演習Iは毎年受講生を集め、学生たちはラジオ番組づくりを楽しみ、FMペポワの学生メンバーも受講生やSAとして放送技術を学ぶことはできた。SA経験者のなかにはメディア系企業の就職を目指す者もあり、のちにコミュニティFM放送局に職を得た者もいた。従って、この部分はある程度機能したと言える。その一方で、受講生の中から新しいメンバーを迎えるという、私がかつとも期待した点はほとんど機能しなかった。どこのサークルへ入会するかは1年生の時にすでに決定していることが多く、情報メディア演習Iの受講を契機としたFMペポワへの入会は、あまり現実的ではなかったようである。講義はあくまでも単位を修得するためのもので、サークル活動とは一線を画すということである。

従って、FMペポワの活動も、新入生の勧誘

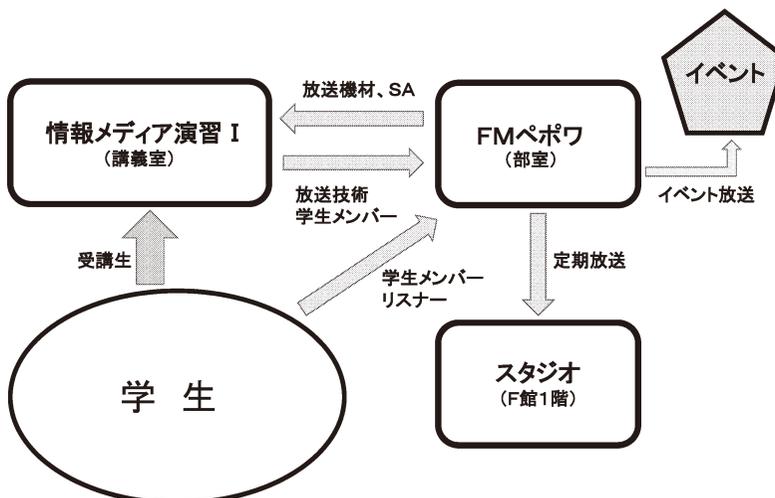


図1 FMペポワの活動と情報メディア演習Iの関連図

を中心に別のルートで新メンバーを確保していた。ただし、新しいメンバーは毎年それほど多くはなく、5～8人程度で週1回の定期放送とオープンキャンパスや大学祭でのイベント放送を維持していくのがやっとであった。リーダーシップがある学生が入会してきた時に、一時的に盛り上がることはあったが、当初掲げていた「大学全体で共有する情報メディア」に近づくことはなかった。

しかも、2008年度あたりから社会情報学部へ入学してくる学生が減少し始めると、FMペポワに入会する学生も減少し始め、他学部の学生たちによって担われるようになっていく。2012年頃に学生メンバー数が約15人とFMペポワ史上最多の数になったが、社会情報学部の学生は1名で、残りは他学部の学生であった。そうなる私と学生メンバーの関係も疎遠になっていく。社会情報学部所属のたった1人のメンバーが卒業したことで、その傾向は決定的となった。

(2) 電波法による規制の影響

ところで、ミニFMの活動の難しさは制度面にも起因していることを指摘しておきたい。ミニFMに対する規制がとても厳しいのである。ミニFMは、免許を受けずに発信できるという手軽さはある反面、電波の強さを「微弱な電波」と規定しており、実際の運用上は「発信地から3メートル離れた所で、1メートル当たり500マイクロボルト以下」となっている。この規定に従うと、電波を受信できるのは発信地から約10メートルの範囲ということになる。電波に乗せなくても声が届く範囲である。これに違反した場合、電波法違反で道総合通信局の指導を受けることになる。2004年5月7日の北海道新聞に「ミニFMに電波法の壁」という記事が掲載されている。記事の内容は、「免許を受けずに放送できるミニFMが出力が強すぎるとして、電波法違反で道総合通信局の指導を受けるケース

が相次いでいる。」というものである。実際、この年、ニセコひらふスキー場のミニFM放送、鹿追町や芽室町の町民有志によるミニFM局、北大祭での公開ミニFM放送などが相次いで指導を受けている。

従って、特に学外でのイベント放送は推奨できないのである。大学の地域貢献という点からみても、もっと自由に学外のイベントに出ていくことができたなら活動の幅は広がったであろう。学生もまた、定期放送よりもイベント放送を好む傾向がある。コミュニティFM放送局のボランティア調査の結果では、放送をしていて嬉しいと感じるのは、「自分の放送に対してFAX、メール、ハガキなどが送られてきた時」であるという回答がもっとも多かった(小内, 2003b)。つまり、自分の放送が聴かれていると実感できた時、喜びを感じるのである。その点からすると、定期放送よりもイベント放送の方がリスナーの反応ははるかにいい。イベント放送でのリスナーの反応はダイレクトであり、自分たちの放送が聞かれているという確かな手応えを感じることが出来るからである。

北海道大学を中心に札幌市内の大学や専門学校で組織されたunit-MというミニFM放送を中心に活動する団体と連携する動きもあったが、結局ミニFM放送に対する規制が厳しいことも影響して話は立ち消えになっている。もう少し規制が緩やかであれば違った展開の可能性もあったかもしれない。

5. おわりに

社会情報学部は、2014年度入試から募集停止となった。2年次科目であった情報メディア演習Iは2014年度が最後の講義となり、2015年度から休講となっている。長い間講師を務めて頂いた松崎霜樹氏には大変感謝している。この講義があったからこそ、なんとかFMペポワの活動を継続することができた

言っても過言ではない。

情報メディア演習 I では FM ペポワの放送機材を使っていたが、休講になりそれも必要なくなった。FM ペポワの学生メンバーには社会情報学部の学生はおらず、他学部生が担っている。もはや社会情報学部の講義と連動した学生活動である必要はなくなり、継続するのであれば別の形態に変える必要があった。幸いなことに、他学部生による FM ペポワの活動は順調に行われているようであったので、関係者と協議の上、大学の文化系サークル活動に移行することになり、2015年4月から正式に文化系サークルとして活動を開始している。

こうして私とは完全に縁が切れることになり、ちょっと寂しい気もするが、廊下などで「新入部員募集」といった FM ペポワのポスターを見ると、「まだ続いているんだな」と嬉しくなったりもする。未永く活動が続くこと

を陰ながら祈っています。

参考文献

- 小内純子 (2003a) 「コミュニティ FM 放送局の全国的展開と北海道の位置」札幌学院大学社会情報学部『社会情報』Vol.12 No.2, pp.1-14.
- (2003b) 「コミュニティ FM 放送局における放送ボランティアの位置と経営問題」札幌学院大学社会情報学部『社会情報』Vol.13 No.1, pp.1-17.
- (2005) 「パブリック・アクセスを教育へ導入する試みと課題 —— ミニ FM を用いた教育実践に関する研究成果報告 ——」札幌学院大学社会情報学部『社会情報』Vol.14 No.2, pp.109-121.
- 津田正夫 (2002) 「いま、なぜパブリック・アクセスか」津田正夫・平塚千尋編『パブリック・アクセスを学ぶ人のために』世界思想社, pp.1-23.